

仙台城跡 二の丸

東北大学川内南キャンパスの調査成果から

東北大学埋蔵文化財調査室

講義・研究活動など、みなさんが大学生活を送っている川内北キャンパス。実は、遺跡の上にあることをご存じでしたか？川内南キャンパスは、仙台城跡二の丸地区の上に建っています。

仙台城と言えば、すぐに本丸が思い浮かぶかもしれませんが、政宗の死後、仙台藩の政務の中心は二の丸に移り、その後、幕末まで中枢として機能します。

これまでに、川内南キャンパス内は18地点におよぶ調査が行われました。その研究の結果、建物跡やその位置関係、出土遺物などの具体的な様子が明らかになってきました。ここでは、その一部をご紹介します。



慶長年間後半 (1610年頃)	伝伊達宗泰の屋敷	伊達政宗の四男宗泰の屋敷があったととの伝承。絵図などの資料はなく、屋敷の規模や他の施設の有無は不明。
元和6年 (1620年)	西屋敷(五郎八姫の屋敷)	二の丸造営以前。政宗の長女五郎八姫(いろはひめ)の帰仙に伴い、伊達宗泰屋敷の北側に西屋敷が造られる。
寛永15年 (1638年)	伝伊達宗泰の屋敷	
	西屋敷 二の丸・中奥	二代藩主伊達忠宗、二の丸造営。正保2・3年(1645・46年)の「奥州仙台城絵図」により、二の丸北側に西屋敷が存続することがわかる。
寛文元年以降 (1661年)	蔵 二の丸・中奥	五郎八姫の死去により、西屋敷は「天麟院様元御屋敷」と呼ばれ、蔵などが置かれる。
元禄年間 (17c末~18c初頭)	二の丸・中奥 拡張	元禄年間を中心に、四代藩主伊達綱村により、二の丸が改造される。西屋敷があった区域を取り込んで、中奥が側に拡張される。
明治15年 (1882年)	火災により二の丸焼失	明治15年、火災によって、二の丸建物が焼失する。
戦後	陸軍第二師団司令部 米軍キャンプ 東北大学川内キャンパス	



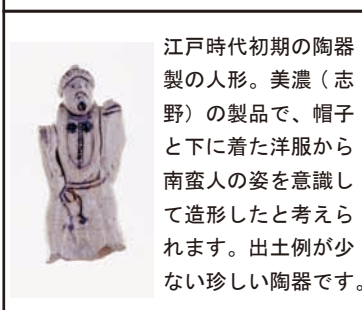
江戸時代初期(伝伊達宗泰屋敷や西屋敷の頃)の陶磁器。中国磁器や唐津陶器、瀬戸・美濃陶器などがあります。



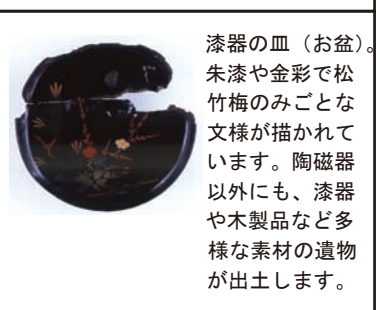
18世紀後葉頃(二の丸・中奥拡張後の頃)の磁器。磁器は、肥前のも(いわゆる古伊万里)が大半です。優品から普段使いのものまで多様。人物が描かれた皿は中国製で、製作年代は17世紀前葉頃。漆で補修し、永く使用されたようです。



同じく18世紀後葉頃の陶器。相馬藩領内(福島県北部浜通り周辺)で生産された大堀相馬や小野相馬の陶器が多くなります。京・信楽の色絵陶器は、高級品としての需要がありました。



江戸時代初期の陶器製の人形。美濃(志野)の製品で、帽子と下に着た洋服から南蛮人の姿を意識して造形したと考えられます。出土例が少ない珍しい陶器です。



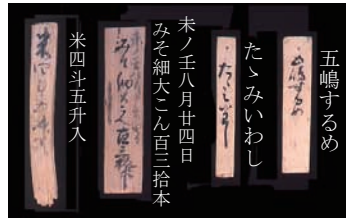
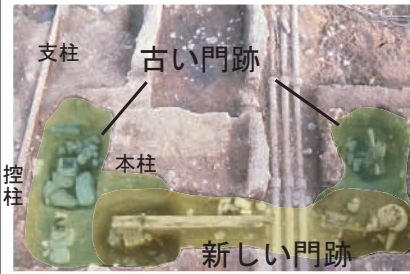
漆器の皿(お盆)。朱漆や金彩で松竹梅のみごとな文様が描かれています。陶磁器以外にも、漆器や木製品など多様な素材の遺物が出土します。

東北大学埋蔵文化財調査室ウェブサイトはこちら→
<http://web.tohoku.ac.jp/maibun/>
 ・各調査地点の詳しい成果は、『東北大学埋蔵文化財調査年報』、『東北大学埋蔵文化財調査室調査報告』にまとめております。
 ・報告書は、図書館で閲覧できます。東北大学機関リポジトリからもダウンロードできます。
<http://ir.library.tohoku.ac.jp/re/>
 ・出土遺物は、東北大学萩ホールで展示しています。

第5地点 現：附属図書館2号館

中奥「御切手御門跡」

荷札木簡



門の柱穴が2時期、重なって検出され、同じ場所で造り替えられていることがわかります。新しい方の門は、地中に埋められた梁の両端にほぞ穴を開け、そこに本柱を据えた簡素な構造の門です。梁と礎板代わりの角材が発掘されました。新しい門の一部壊されて、その下から、構造が異なる古い門が発見されました。本柱の外側に支柱を置き、さらに控柱を配した門です。

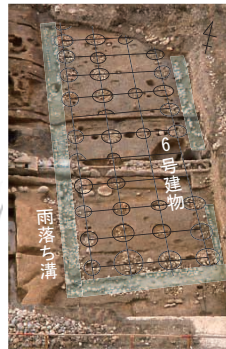
第5地点からは26点の木簡が発見されました。藩に送られた品物に付けられた荷札木簡です。「米四斗五升入」は、年貢米に付けられた木簡で、仙台藩の一俵を表しています。裏には「元禄四年」の年号が記載されています。「未ノ壬八月」も同じく元禄四年を示しています。「みそ細大こん」「たたみいわし」「五嶋するめ」などの品物名が確認されます。

「西屋敷」の建物跡

五郎八姫の西屋敷の一部と考えられる建物跡と池が検出されました。池は大小いくつかが連なり、池を配した庭園跡と考えられます。7号建物に伴う雨落ち溝の形状から、1間四方のコの字状の張り出しを持つ建物と考えられます。庭を望む縁台が附属するような建物で、庭園と一体となって、私的な供応・遊興の空間であったと考えられます。

6号建物は、池・7号建物の区域よりも一段低い部分にあります。1間＝6尺5寸(197cm)の通常の柱間であり、日常生活空間と推定されます。東側で雨落ち溝が途切れる部分があり、建物が廊下でつながり、東側に展開していく可能性があります。

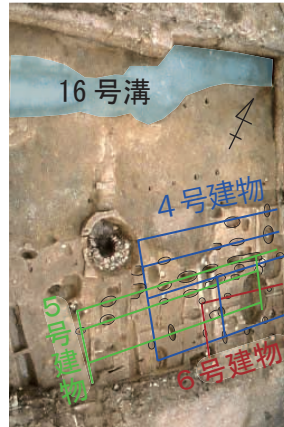
池を配した庭園



第9地点 現：文・法合同研究棟

伊達宗泰の屋敷跡

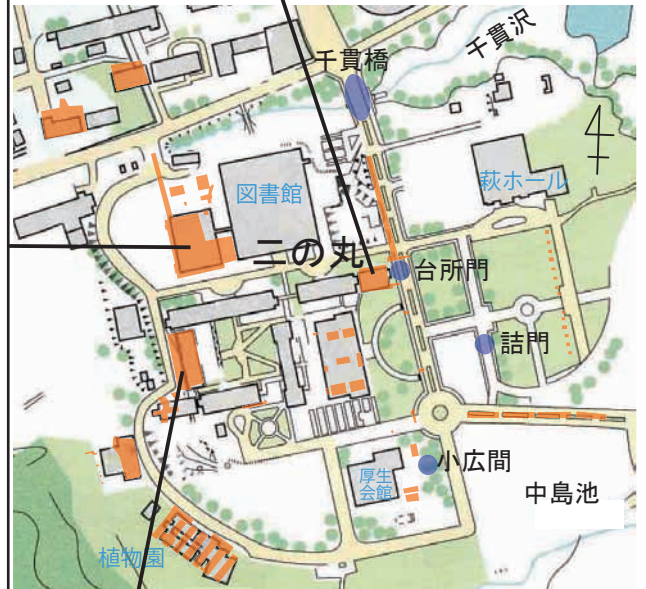
第9地点では、二の丸造営以前の年代となる建物跡が発見されています。16号溝は、宗泰の屋敷地とその北側を区画する溝です。4号～6号建物は、掘立柱建物で、宗泰屋敷の建物の一部になります。二の丸の主要な建物は礎石建物が通常です。屋敷の北側の境に近い場所にあり、掘立柱建物であることを考えると、宗泰の屋敷内でも中心となる建物ではなく、周辺の附属的な建物と考えられます。



二の丸の井戸



二の丸で幕末頃に使われていた井戸です。石積みで、直径は約1.1mほどです。井戸は、発掘調査で各時期に渡って検出され、井戸桶を重ねるもの、素堀りのものなど、形態もいくつかあります。

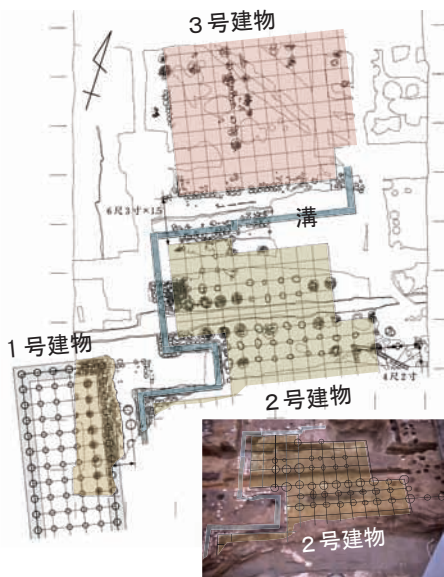


仙台城跡二の丸地区発掘調査地点

第17地点 現：文科系総合研究棟

3号建物

19世紀の建物跡



二の丸の建物は、文化元年(1804年)、落雷による火災のため、焼失します。数年の年月を経て、二の丸建物はほぼ元通りに再建されます。その復興までの暫定的な建物と考えられるのが、第17地点で検出された1号・2号建物です。建物がなかった区域を利用して、再建までの暫定的な施設を建てたと考えられます。1号建物は、細長く堅固な基礎構造から土蔵が想定されます。2号建物は、2種類の礎石の据え方があり、多数の部屋や廊下などが連なった建物と考えられます。

中奥の便所遺構

金隠し板と磁器の皿の出土状況



17世紀中頃～末の便槽遺構です。絵図から中奥があった区域に相当するため、中奥の便所と考えられます。後世に壊された部分もあり、完全な形では残っていません。堆積層は、排泄物に由来すると考えられるチョコレート色のペースト状のもので、ウリ科の種子が大量に含まれていました。出土遺物は、金隠し板、磁器の鉢と皿、紅皿(口紅入れ)、紐を通した古銭の束、櫛が出土しています。便所でうっかり落としそうなものが出土しています。磁器の鉢、皿は完全な形で出土しています。排泄物の上に落としたため、割れなかったと考えられます。便所に鉢や皿を持ち込んだのは、隠れて何か食べたのでしょうか。